

---

# ソウルウィング

z a n

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソウルウイング

### 【Nコード】

N4734Q

### 【作者名】

zan

### 【あらすじ】

大規模なMMORPG、「ソウルウイング」のサービスが終了しようとしていた。

私がともにいたいと願うあの人は、友達も多いし、きっと私もその一人にすぎない。

けれど、私にとってもよくしてくれたあの人と一緒にいたい。

そう願っていても、時間は確実に過ぎ去って、その日を迎えてしまう。

## (前書き)

とくに難しいことを考えて書いたお話ではないので、お気楽にお楽しみいただければと思います。

それではどうぞ、『ソウルウィング』です。

特別、彼が心の優しい人であったとは思っていなかった。ただ私にとっては、いつも話を聞いてくれる人であったというだけ。その認識が間違っていたと知ったのは、そのゲームを始めてからもう半年も過ぎた頃だった。

彼は信じられないほどに穏やかで、冷静だった。そしていつも私のことを気にかけてくれている。ゲームの中で、最初に出会ったのが彼であったという幸運を、今まで幸運と思わなかったのだ。

始めたばかりで右も左もわからず、強いモンスターに攻撃を仕掛けては返り討ちにあって、つまらないゲームだからやめようと思っていたときに声をかけてくれた彼は、「ガントレット」という名前だった。もちろんこれは、ただのキャラクターネーム。本当の彼の名前は知らない。

彼は色々なことを教えてくれた。ゲーム内のイロハをわかりやすく私に伝えて、同時に色々な友達に引き合わせてくれた。おかげで私のゲーム内での交友関係は広まった。皆いい人たちばかりで、私は彼らを頼りにして助言をもらったものだ。考えてみれば、ガントレットはそういういい人だけを選んで私に引き合わせていたのだ。そう考えなければ、納得がいかない。私を騙そうとしたり、悪い方向に導くような人を、彼は寄せ付けなかった。

私は色々な人を頼りにして、自分のキャラクターを成長させていった。もちろん、一番頼りにしたのはガントレット。私が彼を一番に頼っているのは皆にはまるわかりで、彼と二人きりになる時間をよく作ってもらっていた。ガントレットは私という時間を特に大切にしているわけではなかった。彼は他にもたくさん友人がいて、その皆から頼りにされていたので、忙しかった。私がいくら彼といふことを望んでも、私にはあまり縁のない人たちとの会合にまではついていけないし、私ではとても太刀打ちできないモンスターが徘徊

徊するダンジョンにまでついていくこともできない。それでも、私は幸せだった。一日に五分でも、ガントレットと話ができるのならそれでよかった。

こんなにガントレットを大切に思っているのに、ガントレットの態度は最初に出会った頃から変わらなかった。ずっと穏やかで、優しく私に笑顔を見せてくれるのだけれども、決して私は彼の一番にはなれない。どうしても彼は心の深いところを私に開いてはくれなかった。それが苛立たしくて、ガントレットに暴言をぶつけたこともある。そうしたときガントレットは困った顔を見せた後、また明日にしよう、と言ってログアウトしてしまうのである。それで私は貴重なガントレットとの時間を無駄にしたことを後悔するのだ。

ガントレットは強かった。とても強いキャラクターを持っていた。しかし、ダンジョンに出かけても、いつも彼におんぶに抱っこをしていたわけではない。彼は非常に上手に手加減をして、私が活躍できるように気を使ってくれていた。私が楽しいと思うようにただそれだけのために、配慮してくれていた。だから、私は楽しかった。他の誰よりも、ガントレットと一緒にいることを望んだ。ガントレット。素っ気無い名前、けれどガントレット。

ゲームは、不意に終焉を迎える。

私はショックを受けた。このゲームのサービスが終了する、と聞いたからだ。ガントレットに紹介されて知り合った友人はみんな実直で、冗談は言っても嘘は言わない。私はその友人に、初めてこう言った。

「嘘言わないでよ」

「本当だよ、残念だけど。ソースは公式、確かめてくるといいよ」これ以上ない完璧な切り返しを受けて、私は反論できなかった。もうだめだと思った。信じるしかない。

私はその情報について、ガントレットに話した。彼は知っていた

らしく、普段どおりに穏やかに応じた。簡潔に一言、「そうみたいだね」というだけで。彼はそろそろこうなるだろうと思っていたらしい。私はガントレットがどうしてもそんなに落ち着いていられるのかわからなかった。

だからガントレットに訊ねた。返ってきた答えは、そろそろやめようと思っていた、というもの。だから少しその時期が早まっただけで、とくに問題ないという。ガントレットに問題はなくても、私には問題がある。ここに至ってはつきりとわかった。私は自分で思っているよりもずっと、ガントレットに依存していたのだ。それなのに、ガントレットは私のことを気にかけてくれない。

一カ月後に迫るサービス終了の日。それを待たず、ガントレットはいなくなるのだろうか。

しかし、そうはならないらしい。彼は相変わらずの微笑を見せ、私にこう言ってくれた。最後の日に、必ず会いに来るからと。絶対にそれは守るからと彼は言い、私を満足させた。あと一ヶ月は、彼と一緒にいられるのだと思った。

他の友人達は、サービス終了後にどうするかということについて決定しているようだった。他のゲームに移住して、またみんなで楽しくやろうという意見が圧倒的で、早くも移住先のゲームの情報を得たり、キャラクターを育てたりしているようだ。私も誘われていたが、ガントレットがいないのであれば、意味がない。移住は断り、彼らとの連絡はこのゲームのサービス終了と同時に完全に絶たれることになった。

強制的に、このゲームは終わる。ゲーム内で得た友好関係も全て、終わりだった。

ガントレットはゲーム内にいない日が続くようになった。ゲーム終了が近づいているのでやる気を失っているのかと思ったがそうではなく、生活環境が大きく変わるのでゲームをする時間がなかなかとれなくなっているのだということだ。最後の日まで一緒にいられ

ると思っていた私は不満で、機嫌が悪かった。

やっと姿を見せたガントレットに、私はついつい暴言を吐いた。口で言うよりも、チャットで伝えた言葉は重い。あと一ヶ月も時間がないのに、どうして私の傍にいてくれないのか、と彼に言い放った。いつもならここでガントレットはログアウトしてしまうのだが、彼は少し考えた後、こう言った。ぼくは君に会えて嬉しい、だからそう言わないで欲しい、と。私はだったらもっと長く、私と一緒にいて欲しいと思った。ガントレットはきっと彼なりに、時間を作る努力をして、こうしてログインできるだけの時間を作ってきてくれたのだろう。しかし、そのときの私には余裕がなかった。

ぶんぶん怒ったままの私に、ガントレットは微笑む。怒っていた私だが、その日ガントレットと別れる頃には彼と談笑していた。

一ヶ月はたちどころに過ぎ去っていく。

ガントレットは相変わらず接続時間が短くなったままだ。

「明日で終わりだね」

私が別れ際にそう言うのと、ガントレットは頷いた。彼は淡白だった。名残惜しむという言葉とも無縁だった。

「そうだね。もしよかったら、時計台の最上階で待っていてくれな  
いかい」

ガントレットがそう言った。

最後は二人で過ごしたいと思っていた私の心を読み取ったかのようだ。一も二もなく、私は承知した。首を縦に振った。

「それじゃ」

私の大げさな承諾を見届けて、ガントレットは去っていった。私は両手を握り締めた。明日で最後だが、二人きりでそのときを過ごせる。少しの寂しさと、嬉しさがこみあげてくる。少し早い時間だが、私もガントレットに続いてログアウトをした。

明日で全てが終る、明日でもうガントレットと会えなくなる。そんなことは考えない。ただ、明日会う約束をガントレットとした。それだけでよかったのだ。私は安らかな眠りについた。ゆっくりと

眠れそうだ。

翌日、私は自由な時間を得るとすぐにゲームに入った。そして、ガントレットと約束した時計台の一番上にキャラクターを移動させる。今日、彼と会える。私は何を話そうか。彼は何を話してくれるのだろうか。

今日は最後の日。ガントレットというキャラクターが消え失せる日。そして、私のキャラクターも死ぬ。完全に消えてなくなるのだ。この世界は滅ぶ。滅びの日だ。最後、最後の日。ただ、時計台の上に立っている私にも、別れを惜しむ声が届いてきた。ウィスパーと呼ばれる、どこにいても相手に届くチャット機能。私もウィスパーを使って、返事をしていく。

「もう最後だね、またどこかで会えるといいね」

「一度くらい、オフで会いたかったなあ。元気でね」

「きつとまた会おうね、勉強頑張りなよ！」

言葉の糸はあちこちに伸びて、みんなと心をつないでくれる。私は眼下に広がる町の景色を見やる。どれほどの時間、この仮想の町で過ごしたのだろう。ここにあるものはみんな仮想のもので、データ上にだけあるもの。ハードディスクを壊してしまえば、消え失せてしまう電子の塊。私のこのキャラクターも、足元にある時計台も、それを支える地面も、世界も。けれどもここで育んできた友達との繋がりは、消えてしまわない。本名も声も、顔も知らない友達たち。彼らとの連絡方法は絶えてしまうけれど、記憶は消えてしまうことがない。私は決して忘れない。

ウィスパーは多くなっていった。そして、ある時期を過ぎると、減っていった。もう間もなく、世界が終ろうとしているのだ。みんな、遠くにいる私と話すことはなくなり、別れを告げて語らいを終えていった。恐らく、近くにいる誰かと話をしているのだろう。

みんなが私のように、私にとってのガントレットのように。最後に近くにいるべき人をみつけて、その人のそばにいるのだろう。仲



間で揃って円形になっている人たちもいれば、二人きりの人もいる。そして川べりに立って、一人きりの人もいる。一人だけの人は、何を思っているのだろう。

ガントレットはまだ現れない。私も一人きりだ。見下ろす世界は住人との別れを惜しむようにぼやけている。

どうしてまだガントレットは来ないのだろう。私は、それでもこの世界を見つめていた。私が今、一番共にいたいのはガントレットなのに。ガントレット。どうしてここにいない。いてくれない。

『皆さん、長らくのご愛顧ありがとうございました』

メッセージ・ウィンドウにそんな言葉が現れた。これは、運営会社からのメッセージだ。

『お蔭様で五年間、オンラインゲーム“ソウルウイング”は愛され続けてまいりました』

『今夜十二時をもちまして、“ソウルウイング”に関するサービスは全て終了となりますが』

『株式会社スカイハイ・エンターテイメントは、本サービスを選んでくださった皆様に、たくさんの感謝をいたします』

『本当に、五年間、ありがとうございました』

『間もなく、“ソウルウイング”に関するサービスは全て、終了させていただきます』

私は世界を見つめていた。白く染まる世界は、何かをちらつかせていく。これは、雪だ。雪の演出だ。

運営会社が最後のサービスをしてくれたのだ。この雪の演出はクリスマス之夜だけのものだったのに。最後の瞬間を演出してくれたのだろう。

まだガントレットは現れない。

時計の針は、十一時四十五分になっている。サービス終了まで、あと十五分しかない。ガントレットは、どうしたのだろうか。私は一人、時計台の上で立ったまま、降りだした雪を見つめていた。

『お別れの時間が近づいてまいりました』

『最後に、運営チームでサービス終了までの秒読みを行います』

『皆様への、感謝を込めて。本当にありがとうございました』

『それでは、秒読みです。300……』

三百秒から秒読みが始まった。ガントレットはもう、来ないのかもしれない。

私は悲しくなった。何故そう思うのか、わからない。思い出しても、このゲームの中では楽しかった思い出しかない。何度もガントレットに暴言をぶつけたことも、彼に冒険を教えてもらったことも、レアアイテムを手に入れたことも、新しい魔法を覚えたことも、全部全部、楽しい思い出だった。今にして、思えば。

ただ一番最後の最後に、それを語らうことのできる相手がいなかった。いない。

ガントレットは来ない。

それだけが悲しい。“ソウルウィング”の世界は、滅ぶ。美しく滅んでいく。

運営チームの秒読みが百をきった頃、私は顔を上げた。最後に、ガントレットに抱く思いはただ、ひたすらに感謝の念だった。彼には、感謝する。私にとって、このゲームが楽しいものであるように、いい思い出であるように、ずっと気を払ってくれていたのは彼だったのだ。最初に彼に出会わなければ、こんなに楽しく美しい思い出ができることもなかった。顔も知らない名前も知らない友達ができることなんて想像もしなかった。本名も知らない相手に、暴言をぶつけるなんてことは、考えもしなかった。

だから、ありがとう。

ガントレット、彼にはありがとうの一言だけを。

秒読みが終るのを待たず、私はログアウトしようとした。こんなに美しい時間は、私自身の手で閉じてしまいたかった。自動的に接続は切断されるだろうが、その時を待つことはしたくない。ログアウトするために手を伸ばしたとき、私のキャラクターの立つ、そのすぐ隣の地面が光り輝いた。

何が起こるのか、と思った矢先、その輝いた地面にガントレットが現れた。

『64……』

もう秒読みは一分前になろうとしている。このような時間になって、ガントレット！

「遅れたね、ごめん」

彼はそう言った。あまりにも遅れすぎだと私は思うが、その言葉をキーボードで叩くことはできなかった。

会えた！

もう会うことは諦めていたのに、会えたのだ。

「ガントレット！」

私は彼の名前だけを、呼んだ。

「ぼくは、四月から就職するんだ。……ガントレットと呼ばれるのは、これで最後かもしれないね」

「私が呼ぶよ！　ずっとガントレットって……だから」

何がなんだかわからないことを、私は喋っていた。興奮していた。時間もなかった。何か言いたい。ガントレットに伝えたい言葉は、こんなことではないはずなのに。

「もう最後だしね。ガントレットじゃない。ぼくには浜本しのぶっていう名前があるからね」

「でも、私にとってはガントレットなんだよ。ずっと……」

本名を口にした彼に、私は思わず身を乗り出す。今、そんなことを知っても何も嬉しくない。

『23……』

秒読みは迫っている。もうあと、一言か二言を交わせば、もう終わりだ。

「もう、終わりだよ。ぼくは“ガントレット”を捨てる。“ソウルウィング”からも卒業だ」

「みんな卒業するんだよ、あともう、十数秒で！」

こんなことを言いたいんじゃない、言いたいんじゃないのに。私

はもどかしくキーボードを叩く。

「“ガントレット”ではなく、“浜本しのぶ”として、ガントレットらしい優しさを身につけていけたらいいね。現実のぼくは、ガントレットほど温和じゃなかった。だから、ガントレットは今日でおしまい」

「だ、だけどあなたは私にとってはずっと」

『7……』

ついに十秒をきってしまった。

もうこれが最後の言葉になる。もう会話の流れなんかどうでもいい！ 彼に伝えなければいけないことは、これだけだ。

私はキーボードを素早く叩き、エンターキーを叩き付けた。

「ガントレット！ 今までありがとう！」

ガントレットは、驚いた顔をしてみせ、それから微笑んだ。

『3……』

私は息を飲んだ。咄嗟に、スクリーンショットを撮ることもできない。

彼に伝えた。それだけで満足だ、といえは嘘になる。しかし、それだけでも十分だった。

「ありがとう、ぼくも君には感謝してる」

いつもどおりの微笑で、彼がそう言った瞬間、カウントダウンは終わった。

『ありがとうございます。全てのサービスを終了させていただきました  
ます』

『また、新しい世界で皆様とお会いできることを楽しみにしています』

『五年の長きに渡るご愛顧、ありがとうございました！』

真っ白に降り積った雪が光を増していく。私の歪んだ顔も、微笑むガントレットの顔も、全てを包んで消し去っていく。何もかもが見えなくなり、“ソウルウィング”は終わった。

画面には、ゲームから切断されたことを示すミニウィンドウが小

さく表示されているだけになった。

ガントレットは、いなくなった。

彼を操っていた浜本しのぶという人物が、彼から卒業したことに  
よって、彼は消えたのだ。

私がゲームに入れ込んでいた春休みも、ソウルウィングが終了してしまっ  
てしまっからは、やる気もなく過ごして終ってしまった。今日から私も二年生になる。まだショックから立ち直らない私は、始業式の最中に眠りそうになっていた。校長先生の話が長すぎるせいもあるの  
だろう。

その長ったらしい話がようやく終わって、新任の先生の挨拶があるらしい。またつまらない話になるのだろうか、と私は半分目を閉じていたのだが、その先生の一言で我に返った。

「今日からみなさんと一緒に勉強していくことになりました……、  
浜本しのぶと申します」

浜本、しのぶ。それはガントレットの本名だ。忘れもしない。

私は顔を上げた。そして驚愕した。

「担当科目は数学です。主に二年生を担当することになると思います。皆さんと一緒に、楽しい思い出を作っていけたらと考えています。どうか、宜しくお願いいたします」

そう言って微笑んだのは、若い女性教師。ガントレットと同じ本名をもっていて、四月から就職する……こんな偶然があるはずがない。ガントレットは、女の人だったのか……。そんなことに驚いている私に注目するはずもなく、浜本先生はさらに言葉を続ける。

「皆さんは、今日から一つ上の学年になりました。どうか、昨日までの自分よりも、少し強い、あるいは少し優しい自分を想像してください。そして、その想像通りになれるようにしてみてください。今までの自分を少しだけ卒業してみましよう。それを続けることができれば、この学校を卒業する頃にはとても強く、あるいは優しくなれるはずです……」

ガントレット。あなたはこんなに強い人だったんだ。

私は下を向いてしまう。ガントレットは、私なんかが縛り付けていい人ではなかったんだと思った。

「話が長くなりました。以上です！ それじゃ授業でまた会いましょうね」

にっこり笑った浜本先生はぺこりと礼をする。全体の空気が緩やかになっていくのを感じる。見上げてみると、背筋を伸ばした浜本先生が堂々と歩いていくところだった。

鼻の奥が痛くなるのを感じた。涙が溢れる。ガントレットとの最後の会話が思い出されてきた。あのとき、浜本先生は何を考えていたのだろう、私に何を見ていたのだろうか。

次は、私の番なのだろうな。

つまり私も、私を卒業しなくてはいけないようだ。あのときのわがままな私は捨てて、新しい自分にならなくてはならないのだ。

もう、“ソウルウイング”はないのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4734q/>

---

ソウルウィング

2011年1月28日20時25分発行